

思い出すこと——新会長に就任して



わたなべ
渡辺 利夫

中国改革・開放の三十周年の年だったから、数年前のことである。その頃、私は調査やら会議のために中国に出向くことが多かった。台湾でも「中国改革・開放三十年の回顧」といったテーマで国際会議が開かれ、私も招待された。北京でのシンポジウムを終えるや成田に戻り、成田のエアポートホテルで一泊して、そのまま台北に向かったことがあった。北京と台北に漂っている「空気の質」のちがいを、一週間のうちに感じさせられた希有な機会であった。空気の質としか表現できないもののように思われた。

北京ではレストランで従業員が笑顔で私を迎えてくれることなどまずない。デパートの売り子はニコリともしないし、雑踏を歩いていてもよく人やカバンが接触するが、*すみません*の一言もない。空港のバッグゲージクレームでは我先にと旅行カバンを取り出し、周りの人に気遣う様子はない。秋なのに空気はどんより沈んでいる。人々のごく普通の生活の空気が何だか乾いていて、外国人の私は緊張させられる。昔からこうなのか、競争社会になって、こんなふうになってしまったのか。

台北の空港に降り立ち、市内バスに乗ってホテルに向かう。道のりはだいたいわかっているのでバスに乗ったのだが、私の背中にどこか不安げな影が浮かんでいたのであろう。バスに同乗するある中年の女性が私の座席の後ろの方から近づいてきて、日本語でどちらのホテルに行くのかと問うてくれる。それなら自分も降りると同じバス停だから、ご一緒に降りましょうという。

バスを降りると、ホテルのゲートまで連れていってくれるではないか。私がホテルの玄関に入るのを確かめて、彼女はまたさっきのバス停の方に向かい消えてしまった。本当に彼女の降りる予定のバス停だったのか、私のためにわざわざ同じバス停だといって降りてくれたのではないか、と想像したりもした。

その夜は、台北の屋台でひとりビールを飲み、あれやこれやと旨そうな料理を注文して、何とも幸せなひとときだった。街を歩く人々にどこか温かいものが流れている。空気が乾いていないのである。台湾てやっぱり中国じゃないんだよなあ、問わず語りに当たり前のことをつぶやく。台湾大好き人間は日本にも多いが、私もその一人である。

この度、日本李登輝友の会の会長を務めよという要請を、小田村四郎先生から受けた。恩人の先生からのお申し越しに私がノーといえるはずもない。運命共同体日台の友好に少しでも尽くせそうな機会が私にも与えられたのだ。台湾からこれまでに与えられてきた私の幸福の幾分か恩返しができるのかもしれない、と感じている。